

『今とりかへばや』の滑稽さについて

家 井 美千子

はじめに

『とりかへばや物語』は、平安時代の最末期において、ある父親のもとに生まれた二人の子のうち、女性(Sex)として生まれた子が男装して成長し、当時の貴族社会での男性役割(Gender)を担い、男性(Sex)として生まれたほうが女装して女性役割(Gender)を演じ、特に前者が思いがけず妊娠することをきっかけに、それぞれの役割を取り換えて幸せな結末にいたる、という物語である。

現在は、ジェンダー(Gender)の概念が登場したことによって、この物語は理解しやすく、また説明もしやすくなったが、それ以前ではこの設定は「怪奇性」「頹廢性」「変態性」の時代相を表わすものと批評されていた。

現在私たちが読むことのできる『とりかへばや物語』は、改作されたいわゆる『今とりかへばや』であることは、『無名草子』の批評によって明らかであるが、この改作が物語の伝統においてどのような意味を持つのかについて、『無名草子』の次のような賞賛が現在の読者にも影響を与えていると思われる。

ただ今聞こえつる『今とりかへばや』などの、本にまさりはべる様よ。何事もものまねびは必ず本には劣るわざなるを、これはいとにくからずをかしくこそあめれな。言葉遣ひ歌などもあしくもなし。夥しく恐ろしきところなどもななめり。

これに続く文章で『無名草子』が賞賛する『今とりかへばや』の改作の特徴は、まとめれば次のようになるだろう。

1 中納言の男装から女装への変化に不自然さが無いこと

(本には中納言の有様いにくきに、これは何事もいとよくこそあれ。)

2 中納言と尚侍の役割交換が自然であること

(本のは、もとの人々皆失せて、いづこなりしともなくて。あたらしう出で来たる程いとまことしからず。これは互みにもとの人になりかわりて出で来たるなど、かかる事思ひよる筋ならば、かくこそすべかりけれとこそ見ゆれ。)

『無名草子』の、これ以外の登場人物「四の君」や「宮の宰相」などへの批評は、言わば「作中人物批評」とも言うべきものであるので、改作の特徴と言うべきではないが、中納言の妻であった四の君が、夫が入れ替わったことに気がつかないという設定に対しての「むげにいふかひなし」は、改作への評価であるのかもしれない。

しかし全体としての『無名草子』の『とりかへばや』改作の評価は、改作前の「言葉続きも悪く、物恐ろしく、夥しきけしたるもの」から、それらの欠点が緩和され、あるいは無くなり、「まことし」きものに作り替えられた点がすばらしい、ということだろう。

『無名草子』では、他の『浜松中納言』や『狭衣物語』なども「まことし」という評価基準で批評されており、物語世界が「まことし」いかどうかは重要なことであつたと思われる。

このようにしてみると、改作『とりかへばや』の設定は、それが成立した当時においてもあまり不自然なことと考えられなかった、と思われるのであるが、そのように素朴に考えてよいだろうか。

『無名草子』は、もとの『とりかへばや』のプロットである「男女の性役割の交換」そのものを評価していると思われる。同類の物語である『隠囊』の評などから類推すると、その思いつきをどのように物語として仕上げるか、その腕前が「本」は拙く、「今とりかへばや」は優れていた、ということなのである。同じ出発点でも、「本」は「まことしき」がなく、「今」のは「まことしき」に優れていたのである。しかし、根本の設定である「男女の性役割の交換」が「まことしき」であると考えたかどうかは分らない。つまり、この物語（改作前も改作後も）の成立当時、実際の貴族の女性(Sex)が男装して男性役割をこなしている、と考えられたかどうかは不明なのである。

本論においては、以上のような問題について、これまで『とりかへばや物語』を考えるうえで見過ごされてきたパロディ性をも併せて考えていくことにする。

人物の呼び名について

これから『今とりかへばや』を見ていくにあたり、当然中心となる登場人物について述べなければならない。物語の設定によって登場人物の説明が煩瑣になる事を避けるために、中心となる二人についてこの論での呼び方を決定しておきたい。

中納言：女兒として出生。男性役割を好み、男性として昇進の道をとる。

侍従・三位中将・権中納言兼左衛門督・右大将とたどる。親しい友であった宮の宰相によって妊娠、都の社会から失脚し女装する。

に至り、異母の兄(せうと)と役割を交換した後、尚侍・女御となり、のち国母。以下〈中納言〉と呼ぶ。

尚侍：…男児として出生。表に出ることを好まず対世間的には女性と思われ、やむを得ず東宮(女性)のもとに尚侍として出仕する。

仕えるうちに東宮を懐妊にいたらせる。異母妹(いもうと)の右大将の失踪を機に男装し、右大将の役割を引き継ぐ。のちに内大臣から関白左大臣。以下〈尚侍〉と呼ぶ。

この二人の、〈中納言〉・〈尚侍〉という呼び名は官職によるものであり、彼らが時期によって官職を変えるため不都合であるが、この論では主として二人のジェンダー交換前を論じるので、人物を特定するためこのように呼ぶことにする。また中納言は男性の、尚侍は女性のそれぞれ就く官であり、言わばジェンダーを内在させた呼称であるため、『無名草子』以来の研究史上で「女中納言」「男尚侍」のように呼ぶことがあるが、ここではそうした呼称を採用しない。また、この二人の関係は、母を異にするため、どちらが年長(このかみ)であるか判断できない。さきに「兄」「妹」と示したのは、古代語の「せうと」「いもうと」の意であって、一方が他方より年長であることを意図していない。別々の母から生まれていることを考えるとあり得ないが、双生児的存在としてこの物語で扱われていると見るべきであろう。

以上の二人のほかに、最初に「宮の君」と呼ばれる人物がいるが、これも後々の昇進により官職を変えても〈宮の宰相〉と呼ぶことにする。

設定の不自然さ

「まことしき」を『無名草子』に評価された『今とりかへばや』ではあるが、その設定には男女の役割交換以外にもかなり図式的な不自然

さを見ることが出来る。

その第一は、〈中納言〉と〈尚侍〉の父母である。物語の冒頭で、主人公的な存在の定型的紹介のスタイルで登場した父は、二人のほぼ同等な北の方を持っているが、しかしその妻一人とも全く理想的な女性とはほど遠い。「御心ざしはいとしもすぐれねど」や「上たちの御有様のいづれもいとしもすぐれ給はぬ」などから、おそらく容貌も性格も満足できるものではないらしい。その両方にはほぼ同時に子が生まれ、それが母が違うにもかかわらずそっくりな男児・女児なのである。しかも、子どもたちは二人ともこの上なく美しい。成長するに従い、才能も比類ないものであることが明らかになる。二人の優れていない母は子に何ももたらしていないらしいのである。むしろ悪い影響を与えなかった、というべきなのだろうか。

この二人の女性は、つまりは全く不釣り合いな配偶者であり、望ましからぬ母でもある。二人の子が成長して後も、子の性的役割指向が食い違っていることに悩むのは父であり、母たちは何も気にしていないらしい。子にとって最も重要な成人の際にも、例えば、〈中納言〉の母は、女児として生まれたその子が右大臣家の娘に婿どられるという大事の際に、夫の相談に次のように言って笑うのである。

「兎めかしからん人のむすめの、あやしなど思ひとがめ言ふべきならず。ただうち語らひて人目を世の常にもてなして、出で入りせよかし」
(一一九頁)

この母は、男装を捨ててることを決意した〈中納言〉が最後の別れとあって両親に会いに行った際にも、父が非常に感激しているのに対して「母上は、中々いとあらあらしくて、いかなる事をも見とがめ給はず」(一二〇二頁)とまで描かれる。

一方で〈尚侍〉の母は、もう少しマシだと言えるかもしれない。

夫である大臣が、院から子を尚侍として出仕させるよう要請され、「母なる人にのたまひあはせん」と相談したにもかかわらず「いさや、いかなるべき事にかと、え思ひ定められでなん」(一二六頁)とだけ答えるのである。大臣はこれに対して一方的に自分で理屈をつけてこの成り行きを肯定して、本当は男児である子を、女性役割である尚侍にしてしまうのだ。〈中納言〉の母が誤った判断をするのに対して、この母は放任と言えるだろうか。後に〈尚侍〉が女装を捨てて男装する際には、驚きはするが妨害したりはしないし、男装した息子が母に事情を説明していることを思えば、〈中納言〉の母よりは子に信頼されていると言える。

しかし、この家にあつては、子のことををひたすら気づかうのは父の大臣であつて、母の存在は非常に小さい。通常子どもを思いやるのは母の方である、と考えられたとすると(実際、〈中納言〉が母になった際には、そのような考えが見られる)、この父母の設定も通常とは逆転したものであつたと言え、この二人の母はむしろ戲画的な存在である。

また、母が不在の時に信頼されるはずの乳母の存在性も、非常に希薄であることも指摘しておきたい。

つまりは、一見父大臣の二人の子の性的役割交換だけが突飛な設定として存在するようであるが、その背景に二人の母親などもまた自然な人物設定になっているのである。ここまで述べたことをまとめる

- ・ 次のようになるだろう。
- ・ 理想的な父に対して、二人の母は明らかに不釣り合い。
- ・ 全く理想的ではないその母たちからすばらしい子どもたちが生まれる。
- ・ 母が別なのに二人はそっくりで、双生児的である。

これは、二人の子の性的役割交換をスムーズに運ぶうえでの補助的な設定と考えることもできるだろう。また、親としての役割をきちんと果たせない人物は、この他にも右大臣や朱雀院などをあげることが出来るから、この物語の基調でもあるのかもしれない。(全く逆の意味で、吉野の宮も付け加えるべきかもしれない。)³⁾

しかしながら、真っ先に目に付く「男女取りかえ」の設定とともに、以上のような不自然な親たちの設定があることは注目すべきである。

諧謔的描写の存在

物語開始の後、男児(若君)・女児(姫君)のそれぞれが生まれついた性(Sex)ではない性別を指向するありさまが語られ、父の「とりかへばや」の思いにもかかわらず、これ以降、男児は「姫君」・女児は「若君」と物語内で語られる。

成人までの二人については、機能しない母たちの代わりに父の視線から二人の子のありさまが描かれる。つまり男児である「姫君」を見れば、「いっそ尼に……」⁴⁾と思い、女児である「若君」を「いっそ法師に……」と悲観するのである。

特に「若君」については「今さらにせめて、女にとりなすべきやうもなかり。」と、その現在が「男」性であると理解している。

(但し、「姫君」を見て「これを男として見てもすばらしいだろう」と思うことはないが、「若君」を見て「あないみじ。これももとの女にかしづきたてたらんに、いかばかりめでたく、うつくしからん」と思う点で非対称的な観点ではある。)

この後、右大臣家からの縁談を断らないなど、「若君」が社会的に男性であることを追認・強化してしまう。このように、父大臣は女兒が社会的規範から逸脱したとしても男性役割を果たすしかない(「尼」で

はなく「法師」)ことを、いわば観念してしまっている。

しかし読者にとって、女の子が男として成長してゆくことを嘆く親が、「いっそ尼に」とは思わずに「いっそ法師にでもするしかない」と嘆くのは、何がしかの滑稽さを誘われまいだろうか。「姫君」についてもまた同様である。この哀れむべき父親は、自らの嘆きの種であるはずの、我が子が二人とも違うジュンダーを身に付けてしまったことに、なんの疑問も持たなくなっているのである。この落差が、何らかの諧謔性を持っているのではないか、ということをご指摘したい。

この後は主として「若君」(中納言)の活躍が描かれる。この人の特徴は、その外面の美しさに加えて、

琴笛の音にも、作り出づる文の方にも、歌の道にも、はかなく引きわたす筆のあやつりまで、世にたぐひなく、うちふるまひ交じらひ給へるさまのうつくしさ、かたちはさる物にて、今よりあるべきさまにむねむねしく、世の有様おほやけ事をさとり知りたる事のさかしく、すべてことごとくに、この世の物にもあらぬを、

(一一四頁)

と、政治家としての才能が際立っており絶賛されている。

このように聡明である以上、やがて自分自身の状況がいかに周囲の秩序から逸脱しているかを当然理解するようになる。しかしこの状況が「わが心のままにもてなしふるまひ」から発したものであって、どうしようもないことと諦めるのである。

右大臣家四の君との婚姻後、宮中の宿直の際に梅壺女御の参上を見て次のような思いにいたる。

あはれ、我も世の常に身をも心をももてなしたらましかば、かな

らずかくてぞおりのぼらまし、あないみじ、ひたおもてにて、をあらぬさまに交らひありくは、うつつの事にはあらずかし。

(一一三頁)

このような嘆き・後悔はありながらも、中納言であることをやめる気は起こらない。むしろ、父のもう一人の子である人のことを思い起こして

我こそ契りつたなくてかからめ、姫君だに世の常にて、かやうの交らひし給はましかば、飽かぬ事なからまし、身を嘆きても、一人は世の常にておはすと見てこそは、かやうのおりのぼりのかしづきもせまし。

(一二三頁)

と考えるにいたる。しかし、この考え方そのものが既に「男性役割的」である。「世の常」の考え方から見ればまともに開始した〈中納言〉の思惟は、次第に独自の展開をしていく。

言い換えれば、ここで〈中納言〉が何を「世の常」(二度繰り返される)と思っているのが疑問なのである。

自らは、女性 (Sex) として生まれたのに「世の常」ならず男性 (Gender) として生きている。しかももう一人のきょうだいは「世の常」に添って姫君らしく宮中に参上してくれば、というのである。もしかして〈中納言〉は、自分と母を異にする「姫君」が、男性 (Sex) であることを知らないのであらうか。しかし後々の記述からは、お互いがジェンダーを取りかえていることを認識しているので、ここでそれを知らなかったとは思えない。

とすれば、この〈中納言〉の思いもまた、さきの父大臣の「いっそ法師に」「いっそ尼に」と同様の、ジェンダーの内面化ではないだろう

か。つまり、中納言は自分が (Sex とは) 別のジェンダーであることを嘆きつつも、そのことを疑うことができないのである。また同様の状態に陥っているらしい異母のきょうだいのことを思っても、自分が男性役割を果たすこと (「かやうのおりのぼりのかしづき」をする) し考えられない。

こうしてみると、〈中納言〉ははじめに理性的に「世の常」と言いながら、次の段階では異母のきょうだいについてそれとはずれた意味で「世の常」を使ってしまっている。こうした行き違いにも、何らかの滑稽さが意図されていると読めるのではないだろうか。

これと同様の思いは、この後宮中で「督の君」(〈尚侍〉) と対面することになっても繰り返される。

世に似ずをかき御けはひなどを、我身はさるものにいひおき、この御有様をだに、例の人と見たてまつらばやと、飽かずかなしうおぼす。督の君も、この御有様を見るたびごとに、胸うちつぶれつつ、かたみにおぼし乱るる心の中ども、をのづからさるべき程といひながら、疎からずあはれも深かりけり。

(一三二頁)

〈尚侍〉の心中はここでは明らかではないが、〈中納言〉は相変わらず相手を「例の人と見たてまつらばや」と思っているのである。ここには、〈尚侍〉が男性 (Sex) であるにもかかわらず女装していて気の毒だ、といったような思いは全く見えない。ただ「この御有様をだに」という表現から、相手もまた不本意な状態であると認識していることがうかがわれる。〈中納言〉は〈尚侍〉を「例の人」のようにしたら、どのようなと考えているのだろうか。

男性が女装しているのはおかしい、という考えからすれば、「例の人」は〈尚侍〉が男性としてそれ相応の社会的地位を得ている状態に

なるうが、ここでの中納言の脳裏にそれ（尚侍）が男装すること）が浮かんでいゝとは思えない。

帝のもとに参上する梅壺の女御の姿を見たことや、麗景殿の女性との交際に関連してあらわれるこうした思いは、むしろ（尚侍）が正式な天皇の夫人（女御など）になり得ていないことへの残念さであるようだ。つまり、自分のきょうだいは男として生まれてしまったために、天皇の正式な妻になることができない、という嘆きなのである。自分も不本意な生き方をしているが、性を異にするもう一人もまた不本意である。しかし、今の自分のジェンダーを変えること（或いはきょうだいのジェンダーを変えること）だけは思いも寄らない。

しかし、どちらにしてもここは読者に滑稽さを感じさせる叙述である。目の前の「世に似ずをかき御けはひ」の女装の人を見て「この人を自分が男性（Gender）として（お世話したい）」と思うのも、その人が実は男性（Sex）として生まれたことを忘れて「女東宮の後見などではなく、ちゃんとした天皇の妻として（お世話したい）」と思うのも、かなりのおかしみを誘うことである。しかもそう思う主体が、実は女性（Sex）として生まれながら男性の役割を担い、しかもそれを不自然とも思わず内面化した人であるだけに、第三者的にはいっそう滑稽であるはずだ。

このような（中納言）の考え方の矛盾は、持って生まれた性（Sex）と社会的な性別割（Gender）が一致していて疑問を持たない読者には、笑いを誘う設定だといえるのではないか。

繰り返される（中納言）のこのような思いは、以上のような効果を目指されているのではないか、というのが論者の当面の仮説である。

（中納言）の内面化された男性性は、自分の妻の妊娠を知ったところでも微妙な形で顕れる。

世づかぬ身の、うつしざまにてながらふるを、かりそめに静心なく思ひながら、（中略）さすがにすがすがしくも思ひたらずありふれば、つるにをこがましきことも出で来ぬる、我身の心の中こそ人に似ず心憂けれ、大方の世のおぼえは塵つくべうもあらぬ身を、世にとりては痴れがましう見思ふ人あらん、いみじき事なりかし、かくて有ながら、いまだ古りざりけるさまなどを、あやしと思ひあやむる人もあらんなど、さまざまいと憂き身の恥づかしさなりや、かかる身にては、幾世もあるまじきほど、一人あらんと思ひしを、くやしう心憂くもあるかな（一四五〜一四六頁）

こうした（中納言）の心中は、自分が女性（Sex）であることの発覚する恐れなどではなく、男性としての評判が損なわれることへの恥が中心であろう。後悔は、「男性として振る舞わなければよかった」ということにはなく、「長く生きるわけではないのだから、独身でいればよかった」ということにあるのである。妻を持ったことが後悔の中心なのであって、ジェンダーの揺らぎはない。

しかしこうした憾みを四の君に語ろうとするうちに、（中納言）が冷静になっていくのは、やはり男性（Sex）ではないことによるのであるうか。

いとのとやかかにいみじう恥づかしげにて、忍びがたきふしおぼはかりをうちほのめかして、わが心の中にも、「いづくを恨み所にかは」と、心ながらもおかしうおぼゆるに、いとしも心動くほどの心やましさはなきなるべし。（一四七頁）

さらに心を静めて読経するうちに、（中納言）は全く冷静になってしまふ。こうして、男性役割に疑いを持たずに生きてきた（中納言）が、

妻の妊娠によってこれまでとは異なる性意識を持つことも現代の読者には期待されるのだが、物語はその経緯をゆっくりと追うことなく〈中納言〉自身の妊娠という急激な変化によって展開することになり、〈中納言〉の性認識の変遷ということは追求されない。或いは、この物語はそのようなことに興味を持たなかったというべきだろうか。

以上のように、物語の中心的人物である〈中納言〉は、内面・外面ともすばらしさを常に讃えられながら描かれるが、その一方で微温的なながらも滑稽さを含んだ表現でも語られる。

どんなにすばらしい理想的な主人公でも、生まれながらの性(Sex)がジェンダーと異なっているのは、やはり何らかのおかしみを感じさせる存在になる、というのが『無名草子』の評価したこの物語の「まことし」さである、と見ることはできるだろうか。

性(SexとGender)を一致させた後には、以上のような滑稽さを含む表現は〈中納言〉(後に尚侍・女御)には見られなくなる点からも、このことは言えるだろう。

対の存在であるきょうだいの〈尚侍〉においては、物語において殆ど活躍しないためもあるが、このようなおかしみを誘う描かれ方が見つかからない、ということはどう考えるべきかは残る問題である。

滑稽さの主たる担い手——宮の宰相

先に述べてきた〈中納言〉の描かれ方にくらべて、さらにより明瞭に滑稽さを読み取ることができるのは、この物語の前半の妊娠のすべての責任者である〈宮の宰相〉の描き方であろう。

色好みの物語の主人公的存在として、『伊勢物語』の「昔男」よりは『平中物語』の主人公によほど近いこの人物は、物語に登場する主要な女性にすべて恋焦がれる、という役割を持っている。一方で、〈中納

言〉の親友的存在でもある点で、『源氏物語』第一部の頭中将を踏襲した存在でもある。

この〈宮の宰相〉は、その登場の始めから、「をこ」の好色性を体現する人物として滑稽さを担っていたが、中納言との関係性においてそれがより明らかになる。例えば『源氏物語』帚木巻などにも、姉妹のいる男性の容姿からその「いもうと」のありさまを推測することなどが語られ、こうした推測の仕方は物語の常套であり、また実際当時の人々の生活にありふれた行動であったかもしれないが、この物語の間関係にそれがそのまま採用されると、意味が異なってくるのである。そのような視線で見られる〈中納言〉は実は女性(Sex)であり、その容姿から美しさを類推されるはずの「いもうと」の〈尚侍〉が実は男性(Sex)だからである。

この中納言よろづめでたくすぐれたる中にも、掲焉にこまやかなるけはひなどの、女にていみじう見まほしう、をかしようもあるかなど、恋しきにぞ、いとと妹の姫君は思ひやられける。(一二五頁)

こうした視線を語るのに、実は女性(Os)を見ているにもかかわらず「女にて見まほし」(これも物語の定型表現である)という表現を意図的に用いているのである。男装している女性(Sex)を見て「女にて見まほし」と思う人物の姿は、その事情を知る第三者(読者)には滑稽なだけである。

また〈宮の宰相〉は、はじめに〈中納言〉の妻四の君と関係を持ち、後に強引に〈中納言〉とも関係を持つに至るのだが、表向きには男性の同性愛に見えてしまうこの関係の異常さは、物語内で「異様」「醜陋」「怪奇」といった評価づけをされることはなく、ただただ〈宮の宰相〉の「をこ」の行動として表わされるのである。

その滑稽さの極みとも言えるのは、〈尚侍〉を男性(Sex)と知らず言い寄る場面であろうが、設定そのものに滑稽さが感じられる場合以上に、〈宮の宰相〉の行動の描き方には、その語りくちに皮肉さをもじませた表現を見ることが出来る。例えば、中納言と関係を持って後、右大臣家に向いての再会を断られて

このわたりは、方々いとたち離るべき方なきふるさとなれど、人目あやしかりぬべければ、たち帰る心地もあるにもあらず嘆き明かしたつ。
(一八六頁)

のような、「方々いとたち離るべき方なきふるさと」といった言い廻しなどである。この〈宮の宰相〉に影響されてか、帝の〈中納言〉への視線の描写にも皮肉な可笑しみをこめた表現がある。

中納言のかたちのいみじうにはひやかに見まほしきを御覧じて、
督の君のいとよく似たりと聞く、げにこれ、髪長くて、よく化粧じ、額髪長やかにかかりたらんは、天女の天降りたらんもうるは
しうことごとしかりぬべし、これはげにぞ愛行づき、はなやかな
るさまは並ぶ人あらじなどをおぼしやるに
(一八七頁)

帝は目前の〈中納言〉から、その同胞の〈尚侍〉の容貌を想像しているのであるが、その方法は、男装している〈中納言〉の、髪を長くし、化粧をさせ、額髪をかけるなどの「女装」を空想する、というものであった。後にはこれが実現するのであるが、この時点では、実は女性(Sex)である〈中納言〉が男装しているのを、想像の中で女装させる、という手の込んだ、実情を知っている読者には馬鹿馬鹿しくさえ見える設定なのである。しかもこの帝の視線に気づいた〈中納言〉の、

け近く馴らしては、宰相にこりにたれば、まめやかにかしこまりて、いかにも世の常の有様を思ひ離れたるさまをすくよかに奏して候ふ
(一八七〜一八八頁)

という態度との対比が、さらなる滑稽さを醸し出している。

結局〈中納言〉を女性(Sex)と知らない男性たちの視線が、そもそも笑いの種なのだろう。この〈中納言〉に頻繁に視線を送る、最も近い存在が〈宮の宰相〉だった、ということでもあろうが、この時の〈宮の宰相〉は、それにさらに「実は女性であることを知ってもいるので気もめる」という要素が加わって、さらに複雑なおかしさにつながると思われる。こうしたややこしい事情にいたると、〈宮の宰相〉はストーリーカー的行動を取るようになり、それがまた皮肉な表現で語られる。

かうのみしつ、内裏にもいづくにも、身をさらぬ影のごとく立ち添ひたれど、まことに思心のゆくばかりの逢ふ瀬は、いとかたうのみもてなしつ
(一九〇頁)

このように付き纏われる〈中納言〉にとって、〈宮の宰相〉は厄介な存在ではあっても、愛情の対象というべきものではなかったのではないか。

この君達の候ひ給ふ時は、殿上人などいとお心に思ひて、宿直所につどひ集まるに、宵の程は物さはがしくむつかしければ、こまやかなる物語のやうにて、いたく誰をも見入れずなりぬれば、とかく行き別れぬるほどに、泣き恨み給ふさま、いみじうあはれ也。人目もいとあやしかるべし。
(一八八頁)

ここでの「あはれ」は、〈中納言〉の〈宮の宰相〉への愛情の顕れとい

うよりは、現代語の「哀れ」に近いのではないか。むしろ〈宮の宰相〉の態度についての嘲弄的な表現だと感じられる。冷静な〈中納言〉に對して、男性(♂)である〈宮の宰相〉が理性を失って社会の規範から逸脱する行動をとっている。そのいわば「みっともない」行動を「いみじうあはれ也」と婉曲に皮肉に表わしているのではないか。「人目もいとあやしかるべし」と続けているのは、その皮肉さを際立たせるためであろう。

〈中納言〉としては、煩わしいにもかかわらず周囲の視線も顧みず寄り寄ってくる〈宮の宰相〉が、「いみじうあはれ」なようすで恨み言を言うのである。こうした「あはれ」に愛情が籠ってはいようとは思えない。その後も「いづ方にも人知れぬ宰相」(一九六頁)のように、〈宮の宰相〉は諧謔交じりの名づけで呼ばれている。

しかし、〈宮の宰相〉は一方的に愚か者として描かれるだけではなく、〈中納言〉の心理を的確に捉えてもいる。〈中納言〉を恋人として独占したいからでもあるが、彼にとって不都合な男装をやめ女装することを勧める言葉は次のようなものである。

「年ごろは、例の男のありさまと見るを、かくて見奉るは、いみじきものの姫君よりもけになん覚ゆるを、もとの御有様もさにこそはあめるを、今は忍びて、女さまにて籠り居給ひね。かくてのみは、心のままに見奉るべきゆへもげになきことなれば、いみじうなんわびしき。昔からかかる中となりぬれば、いみじうあるまじき事といへど、その便なきにしたがふこそ例のことなれ。御ためにも、いとあやしき御有様なり」(一九三頁)

〈宮の宰相〉は、男装している〈中納言〉にここで「なぜそのような不

自然な事をするのか？」といった質問はしない。〈中納言〉が〈宮の宰相〉よりも政治家(男性)として優れていることをよく認識しているからでもあるが、女性として(男性から)見てもすばらしいし、「もとの有様もさにこそはあめる」、つまり本来(もと)もあなたは女性なのだろうから、女性として今後生きたらどうか、と言うのである。また、このような二人の関係を女性(〈中納言〉)側から見ても「あるまじう」「便なき」ことであることを思いやってもいる。それでもそれに従うのが通例、と言うのは甚だ男側に都合の良い、身勝手な言い分ではあるのだが。

しかも、〈中納言〉にとっての女装すること＝男性としての社会的地位を捨てることのデメリットをよく理解している。

内裏に参り給へるに、見奉る人ごとに、目を驚かしたり。宰相の内将も、人よりことなるさまして参りあひて見るに、かばかりにて交らひそめ、世の覚え・有様、かくもてなされたるに、身を変へにくからむやと胸つぶれて(二〇二頁)

と、〈中納言〉が男装を捨てないのではないかと危惧し、また〈中納言〉の右大将昇進の後には

いみじかりけるかたち・才のほのかな、かかる身をもてうづもらさん事も、我になりて思ふに難しかしと、夜もすがら思ひ明かして(二〇五頁)

のように、その男装の事実を知っているからでもあるが、〈中納言〉自身自らの地位を投げ捨てることの無念さを感じていることを、よく理解しているのである。

このように〈中納言〉の心情を正確に汲みながら、一方で〈宮の宰相〉は、政治家としての〈中納言〉の姿と、恋人としての姿を一致させられない心の迷いとともに、本来もっている愚かさからひたすら女装を勧めるのである。なおも〈中納言〉に女装を勧める発言は次のようなものである。

かくてのみは、誰が為もいとたへがたくなん。誰も誰も、なにとなく若き程なるこそ、内裏わたりなどにて、常に同じ所にあるもつきづきしけれ。をのをの大人・上達部などにもなりぬれば、ことなる事なくては、え内裏わたりなどにも御宿直もなし。里にても、かたみに行きあふ事、人目をおぼせばおぼろけならぬ限りはなく、見まほしきもあまりわりなきを、かかるつゝに、身をなきになしつとおぼして、聞こゆるさまに従ひ給ひね。

(一九七頁)

この前半の言い分は、〈中納言〉にとって全く説得力がないものだろう。「今はお互い若いから宮中でも一緒にいる時間が取れるが、今後年長となるならば立场上頻繁にあうことが難しくなる。」と言う理由だけで「女の生活をせよ」と言うのである。〈宮の宰相〉のここでの考えは「どうしたら恋人と心置きなく会えるか」だけに集中していて、〈中納言〉が男装のままいたら今後どのような困難があるかについての見通しなどない。こうした全然説得力のない、実に馬鹿馬鹿しい発言を〈宮の宰相〉は繰り返すのである。

こうした発言とともに、一方では相変わらず四の君にも愛情を振りまく軽薄な〈宮の宰相〉の態度に、〈中納言〉は心から信頼できず、最終的に男装を決意させるのは、出産の時期が迫って他の方法が見つからないためやむを得ずであった。このような両者の心情の差もまた、

滑稽さを誘っているのであるが、この〈宮の宰相〉がかつての〈中納言〉に対して初めて高圧的な発言をするのが、〈中納言〉の女装後であることは暗示的である。

「これこそは世の常の事なれ。年ごろの御有様は、うつしごとやおぼしつる。もとよりひたおもてにさし出でて、あまねく人に見え交らはんの御このみに、ことさら交らひ給しにこそありけれ。めでたくとも、我身をあらぬに変へて過ぐし給へること、有べきことならず。あやしくとも、かくておはせんこそ、例の事なれ。」

(二一八頁)

この発言を物語は「言ひ知らせあはむる」と表現する。これまで〈中納言〉に対して常に下位にあった〈宮の宰相〉であったが、この時点で彼は権中納言、これに対して〈中納言〉は今では社会的には何の地位もないただの女性である。このような関係にあって初めて〈宮の宰相〉は恋人を批難することができたのであった。

批難の内容は、「あなたが男装を好んだのは、顔を顕わに見せて他の人(男性)と交際したいという欲求からだ」という推測と、「それがどんなにすばらしいことであっても男装はおかしなことで、あなたは不愉快でもそれに耐えねばならない」という指摘である。この「めでたくとも」や「あやしくとも」に、やはり相手(中納言)の心情を理解する〈宮の宰相〉の特質が顕れているのであろう。

しかしこうした心情の理解力は、〈宮の宰相〉の褒められるべき特質であろうか？

実はこの後〈宮の宰相〉は、四の君とかつての〈中納言〉のほぼ同時の出産騒ぎの中でうろたえ奔走する、いよいよ愚かな人物として描かれていく。その愚かしさが、女装となった〈中納言〉の宇治からの

脱出に役立つからでもあるが、登場人物としての〈宮の宰相〉の第一の特性は、その愚かしさから醸し出される滑稽さなのである。事を考えると、上記の発言も彼の美点を描こうとしたものとは断定できないのである。

むしろ彼は、男性 (Gender) として愚かである「二流の男性」であるために、男装の〈中納言〉の心情を理解できる存在なのではないかとさえ考えられる。

物語を批評する物語

以上のような〈宮の宰相〉に滑稽さが担われる表現以外にも、この物語は〈中納言〉が男装であることにかかわって、様々な場面で滑稽さを醸し出しているといえる。例えば、〈中納言〉が女性 (Sex) であることを全く知らないまま最愛の娘に右大臣が婿取りをする場面では、

いとやんごとなき本意おはする人にて、すぐれてかしづき聞え給ふ御むすめに、大殿の三位の中将をとりよせたまふ御けしき有様、何事もなぬめよろしからんやは。(一一〇頁)

これは婿の〈中納言〉が男性 (Sex) であれば全く問題の無い、むしろこの状況にふさわしい表現 (先例のありそうな表現) である。しかし読者は〈中納言〉が男性 (Sex) でないことを知っているのだから、これは逆に皮肉に受け止められる。

次は〈中納言〉の何気ない行動が、次の思いがけない展開につながっていく、と見られる箇所である。宮中で父左大臣の勧めをうけて、〈中納言〉と〈尚侍〉が笛と箏を演奏し、それを立ち聞いた〈宮の宰相〉が「まやのあまり」と歌うという場面で

中納言琵琶をふと取りかへて、「おし開きて来ませ」とかき鳴らしたり。(一一三頁)

この場面にすぐ続いて、〈中納言〉の妻である四の君に〈宮の宰相〉が密通してしまう、その際に〈宮の宰相〉の行動は「おし開けて、つつまず歩み入りたまふ」と語られるのである。つまり〈中納言〉の「おし開きて来ませ」という誘いに、〈宮の宰相〉が最悪な行動で応じた、ということになる。催馬楽の言葉を使ったその場限りの風流な行動であっただけのはずのものが、その後の皮肉な展開を呼び起こしているのである。さらには結局〈中納言〉は〈宮の宰相〉をみずからの婿として待遇すべきかどうか迷うにいたることを考えると、この場面はかなり皮肉な発想で構成されると言えよう。

このような諧謔性は、〈中納言〉が吉野の宮を訪れるようになると影を潜める。しかし、吉野の宮の世界がそもそも『源氏物語』の宇治の世界と明石の世界を踏まえたものであるらしいことを考えると、この物語はその始めから一貫して先行の物語を踏まえながら、それらをおくつか組み合わせ批評しながら語り直す、といった態度で構成して行く方法を取ったのだと改めて気づくだろう。こうした態度は、「メタ物語」とも言うべきものである。

そして、この物語の始まりの方法は、達成された物語伝統を諧謔的に語り直す、というものであったのではないかと考えるのである。この物語の可笑しさの根源は、もちろん「男女役割の交換」という設定そのものから発している。特に男装している〈中納言〉を描くにあたって、この人を「これが女性であるのなら」「もし后であるなら」といった視線で見える態度を、男女役割の交換など無いそれまでの物語と同じ語り方でまともに語る、ということと読者の滑稽感を誘ったのである。(これは、決して自分では笑わないコメディアンの方法に似ている)

しかし、〈中納言〉が妊娠し出産する、という展開にいたると、こうした諧謔の方法は取られなくなり、最初の奇想天外で現実離れた設定によって物語内に立ち上げられた現実と真剣に悩む〈中納言〉の、新たな運命の展開へと、物語はその推進力を変えたようである。そして笑いを誘いつつも愛嬌のあった〈宮の宰相〉は、出産後の自らの将来を考える〈中納言〉の思慮において、ついに「をこなりや」(二四八頁)と断定されるにいたる。

物語で一度消えた諧謔性は、〈中納言〉が女装のまま都へ戻り、女性(Sex・Genderとも)として、貴族社会で定位置地位の上昇をたどると、もう一度〈宮の宰相〉の滑稽さとして現れる。しかしその後の彼は、ただの愚かなだけの存在となり、特に〈中納言〉と〈尚侍〉の役割交換が完了して後の宮中では、〈中納言〉の過去を知らながら、真相を最後までわかることのない全くの愚か者として嘲弄的のみ描かれ続ける。こうした愚か者としての〈宮の宰相〉の語られかたは、始発をパロディとしたこの物語の回帰なのかもしれないが、しかし始まりの時の姿とはかなり違ったものになっていよう。

以上述べたように、改作『とりかへばや物語』は、先行の物語そのものを批評しつつ新たな物語に作り替えてゆく物語である。この場合という「先行の物語」は、単に『古とりかへばや』だけを指すのではなく、『源氏物語』を代表とするそれまでに数多く作られた物語類である。

そしてその改作の方法は読者にそれまでの物語伝統の教養を要請するものだった。現在の読者には分かり得ない箇所、当時の読者が「ここはあの物語だ」と納得する場面を多く含んでいると思われる。それらをすべて指摘するのは、今では非常に困難だと思われるが、今回本論で指摘したのは、近・現代のこの物語の読み方の中であまり指摘

されない、笑いの要素についてであった。この物語は、言わばシチュエーション・コメディなのである。つまり、男女役割の交換という設定そのものにおかしさを生み出す力がある。あとは、それを生かすように物語を進めていくかどうかにかかっている、と言えるだろう。

このように見たときに、初めに述べた疑問についてはどのように答えられるだろうか。

『無名草子』の『古とりかへばや』と『今とりかへばや』との評価の差は、以上に述べてきたような「もともとの設定をどのように活かすか」ということに基準があったのではないかと考えられる。「かかる」と思ひよる末ならば、かくこそすべかりけれ」という「今とりかへばや」への高い評価は、「男女役割交換」の設定が改作前も後も共通していたからだと読める。『古とりかへばや』がその設定を「物恐ろしく」「夥しく」展開させてしまったことを批評しているのである。

現在『古とりかへばや』が残っていない以上、その内容に関しては推測するほかないのだが、『無名草子』の言い分からは、現実には有りえない(と思われる)設定を、そのままリアルに語ろうとしたのではないかと、と読むことができる。その結果が「物恐ろし」であり「夥し」という感想であった。つまりこの設定は非現実的だからよいのであって、それをあまりに現実的に描こうとすると、当時の読者は受け付けないのである。

これを前提にすれば『今とりかへばや』の成功は、それを「笑いに包む」ということで始めることによって可能になったのだろう。『今とりかへばや』は笑いだけでなく、全体が先行する物語の言わば「本歌取り」で成り立っており、このような仕掛けを理解してはじめて、読者は安心して『メタ物語』である物語を読むことができたのである。

このように初期の読者である『無名草子』の批評を解読するとき、

最初の疑問、この物語根本の設定である「男女の性役割の交換」を当時の読者が「まことし」であると考えたかどうかについての解決の方向が与えられるだろう。

当時の読者たちは、この物語の設定を非現実的であるからこそ好んだのである。しかしそれをあまりに現実的に描かれるのは恐ろしかった。『古とりかへばや』の悪評がそれを示している。「これはそもそも冗談である」という始まり方（『今とりかへばや』をもって始めて、安心して楽しむことができるような設定であった）。

しかしながら逆に考えてみれば、この「男女役割交換」の現実味が理解できるからこそ、彼らに恐れを与えたのではないかとも思える。当時の貴族にとってこの程度のジェンダー交換が現実には可能であることは、おそらく理解できていたであろう。

注

- (1) 藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇』（明治三十八年刊 但し一九七一年に平凡社東洋文庫として新校訂本が刊行されている。）
- (2) 『無名草子』の引用は、岩波書店『日本思想大系』『古代中世芸術論』に収められたものによる。（三八一頁）
- (3) 『とりかへばや物語』本文の引用は、岩波書店『新日本古典文学大系』により、引用後に所在頁を示す。但し、同音の繰り返しを表わす踊り字を書き改めた箇所がある。
- (4) 右大臣は最愛の娘を溺愛するあまり、理性的判断ができない。また、朱雀院は最愛の娘を異例の東宮にするが、信頼できる乳母などを与えられない。この結果二人の娘である四の君と東宮は、思慮のない女性となっている。逆に、吉野の宮は物語では聖人的存在でありながら、その状態では娘一人の幸せを實現できないため、『中納言』に頼って娘達の安定した将来をめざす。結局、この物語は「子の教育に失敗する親達」の物語でもある。
- (5) 岩波新日本大系本では「人目もいとあやしかるべし」を次に続けて「中納言」の発言と捉えているが、ここでは前文に続く地の文（『中納言』の心内を表わす）と考えるべきと判断し、そのように表記した。